

《何故、日本は戦ったのか》

〈海軍編 中編〉「T字戦法」の封印

海戦のさなか、確かに一時的にT字に近い陣形になったものの、作戦としてのT字戦法は最初から採用されていない事が明らかになっている。基本戦法としてのT字戦法を封印せざるを得なかったのは、前年の夏旅順ロシア太平洋艦隊の間で繰り広げられた黄海海戦にあった。当時の旅順のロシア太平洋艦隊はロシア海軍最強の艦隊だった。しかし彼等は多数の要塞に守られた旅順港の奥から動かず、その為日本の連合艦隊は老朽船を沈める閉塞（へいそく）作戦を3度にわたり敢行したが、強力な要塞砲によって無残にも打ち砕かれた。日本海軍の逸材である広瀬武夫が戦死したのも、この閉塞作戦中であつた。

ロシアはバルチック艦隊が日本で合流する迄、太平洋艦隊の温存をはかったのである。日本もそうなれば勝ち目がない為、海軍は陸軍の旅順攻略を担う陸軍第三軍に港内への砲撃を要請すると共に艦砲射撃を続けた。徐々に損害が大きくなるにつれ業を煮やしたニコライ二世は旅順からウラジオストックへの退避を命じる。日本海軍はロシア太平洋艦隊動く…の報を受け、黄海を南東に向けて航行中の旅順艦隊18隻を補足した。



日露戦争の舞台

秋山参謀はT字戦法で敵艦隊を撃滅するチャンスとばかり、戦術を実行するよう東郷司令官に進言し実行する。三笠はこの海戦で二十発以上を被弾するが沈むことはなかつた。

た。(33人戦死・92名負傷)。しかしウラジオストックへの進路を塞がれたロシア艦隊は、急に南に舵を切った。これでは「T字」は完成せず逃げられてしまい、追撃態勢に入った時には三万メートルも引き離されていた。やっと八千メートルまで追い上げ、熾烈な砲撃戦となり、三笠の放った砲弾が敵の旗艦の艦橋を直撃し、ウイトゲフト司令長官や幕僚を吹き飛ばした。続けて司令塔にも命中、指揮系統が崩れたため、四分五裂となりながら迷走した。ロシア旅順艦隊は満身創痍となり9隻が旅順に舞い戻った。旗艦ツェザレヴィッチと駆逐艦三隻は青島に逃げ込み、国際法に基づき武装解除された。ウラジオストックには一隻も行けなかった。



秋山 真之

この体験から「T字戦法」の致命的欠陥を身に染みて感じたのである。敵が戦いを避けて変針した場合、回頭に時間がかかって逃げられ、効果を発揮しないのだ。故に日本海海戦の一ヶ月ほど前、対バルチック艦隊戦策会議に於いて「T字戦法」は中止になる。

〔秋山参謀の七段構え〕

「T字戦法」に替わる新戦法は、秋山の脳漿から絞り出された火力の強い「下瀬火薬」と最新鋭の「伊集院信管」のお陰で、黄海海戦では敵艦を炎上させ大きな成果を挙げはしたが撃沈した艦は一隻もなかった反省から、実戦では駆逐艦や水雷艇による雷撃が欠かせぬことを思い知らされた。

注1) 下瀬火薬

海軍技師の下瀬雅允が実用化したピクリン酸を成分とする爆薬（炸薬）である。日露戦争当時の日本海軍によって採用され、日露戦争における大戦果の一因とされた。なお、大日本帝国陸軍では黄色薬と呼ばれていた。

注2) 伊集院信管

伊集院五郎海軍大佐が考案した信管。砲弾が飛んでいるうちに、尾部のネジが回転して安全装置をはずすのが特徴で、日露戦争で広く使用された。下瀬火薬とともに語られることが多い。非常に敏感であり、砲弾がどこに命中しても爆発したと言われている。

秋山はバルチック艦隊撃滅のシナリオをわずか四日間で描いてのけた。

- (1 段) 夜間の奇襲
 - (2 段) 二日目は艦隊主力による敵艦隊攻撃
 - (3 段) 夜間の駆逐艦、水雷艇による雷撃
 - (4 段) 三日目は艦隊の大部分による敵艦隊残存勢力の追撃
 - (5 段) 夜間における駆逐艦、水雷艇による攻撃
 - (6 段) 残存勢力追撃
 - (7 段) ウラジオストック港口に敷設した機雷区域に追い込んで触雷を誘う
- と言う壮大な作戦である。後、戦史研究家によって「七段構え」と表現される。

《戦いの実態》

明治38年（1905年）5月27日早朝、東郷平八郎率いる連合艦隊はロシアバルチック艦隊との決戦に臨む為、泊地の鎮海湾を出撃した。旗艦三笠の前部最上艦橋には「指揮官先頭」の精神を貫く東郷が眼光鋭く仁王の如く立ち、背後には加藤友三郎参謀長、秋山真之首席参謀、安保清種（あぼきよかず）砲術長、長谷川清測距儀担当、伝令の少尉候補生数人が控える。



東郷 平八郎

この時東郷は尊敬する「ネルソン提督の最後」に自分を重ねていたかもしれない。トラファルガー海戦で戦死しながらもイギリス海軍を勝利に導いたネルソンのように、この一戦で戦死したとしても御国を救えるのであれば本望であると。もとより幕僚達も死を賭して、頑丈な司令塔には移らず、東郷の傍らに立ち控えたのであろう。

この海戦が事実上、日露戦争の帰趨（きすう）を決定する戦いであることは誰もが心に期していた。しかも連合艦隊の「勝利」はバルチック艦隊の撃滅以外にはない。敵の主力艦隊が数隻でも生き残ってウラジオストックに入れば、連合艦隊は日本海や黄海の制海権を確保できず、援軍・物資や弾丸・兵器を船で送る事は不可能となる。この海戦の難しさは、無論、東郷や幕僚は百も承知の上だった。ところが、連合艦隊はただでさえ厳しい海戦をさらにいくつもの「誤算」を抱えて戦う羽目になる。

第一の想定外は天候であった。海戦の当日、5月27日秋山は絶句する。波が高いのだ。これでは機雷の散布も、水雷艇の奇襲作戦も中止せざるを得ない。即ちこの海戦は始めから想定外の戦いから始まるのである。水雷艇は木の葉の如く翻弄され、煙突から海水が入り、ボイラーが故障しかねない状態で、東郷は断腸の思いで奇襲を断念、対馬での待機を命じ、これで連合艦隊の秘策は潰えた。

秋山はこの誤算を大本営に認識させる為「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊は直ちに出勤、之を撃滅せんとす」の後に「本日天気晴朗なるも波高し」と打電している。即ち「天候次第では奇襲は使えない」と、深刻な状況を伝えたのである。

次の想定外は、三笠が艦橋からバルチック艦隊の艦影が視認された時、敵艦隊は連合艦隊の真正面に来ていたのである。司令部は思いがけぬ状況に激震が走り、将兵達は絶句する。バルチック艦隊は東に回頭し、並航戦に持ち込む予定だった敵が今眼前にいたのである。これはなんと通報艦の誤認という極めて重大な人為的ミスがここに来て生じてしまったのである。しかし東郷は「皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」を表す「Z旗」を仰ぎ見ながら瞬時に、敵弾は三笠が引き受けると覚悟を決めていた。「肉を切らせて骨を切る」と！！まずこの三笠を敵の標的にさせながら並航戦に持ち込もうと、東郷はじっと前を見据えながら面舵を命じ、西に変針を命じたのである。



Z旗。アルファベットの最後の文字。絶対に負けられない戦いの意。

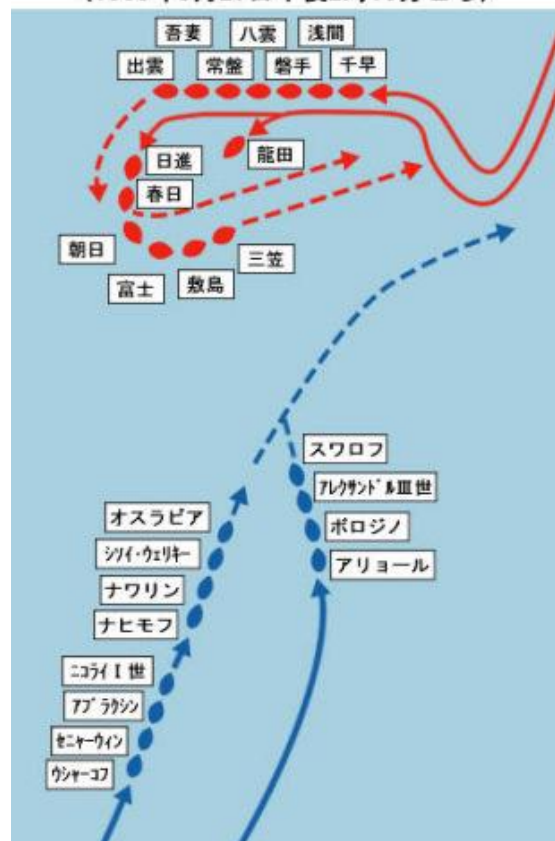
三つ目の想定外

バルチック艦隊を正面に迎える想定外の展開に、一旦敵をやり過ごすか、敵前で回頭するかを決断を東郷は迷わず「取舵一杯」を命じ、敵前大回頭（東郷ターン）を行う。

「万が一にも逃がすわけにはいかない、三笠が沈められようとも」東郷の気迫は、三笠への信頼が支えていた。敵を日本列島側におき、ウラジオストックへは逃さぬ為でもあったそれと早く並行戦に持ち込むためだが、敵眼前での回頭は、特に先頭を行く旗艦三笠は砲撃の的となり、集中砲火を覚悟しなくてはならない。三笠の黄海戦で確信した「耐弾性能」を信頼すればこそその東郷の決断だった。射定内にある、横腹を見せ反撃できぬ連合艦隊に対しチャンスとばかり砲撃を開始したのは当然である。先頭の三笠は19発もの命中弾を受けたが致命的損害を免れる。（海戦を通じては右舷側に約40発、左舷側8発被弾）。命中する度に艦は軋み、赤く炸裂し無数の破片が飛び散り爆風が走る。戦死者は続出する。皮肉にも最も安全と思われたトーチカ状の司令塔に居た参謀達は横長の窓から飛び込んだ砲弾の破片で負傷したが、裸同然の艦橋最上部は不思議なことに敵弾は東郷を避けるように他の場所に着弾した。天運と言うしかない。

三笠は一方的に撃たれながらも耐えながら敵前回頭（東郷ターン）を終えると、連合艦隊は並航戦に持ち込み反撃、右舷後方のバルチック艦隊に午後二時十分三笠の主砲、右舷測砲が咆哮した。まさに絶体絶命から起死回生への転換となった瞬間であり、乗組員の士気と練度が高い命中率で敵艦隊を圧倒する。

日露両艦隊の位置関係
(1905年5月27日午後2時10分ごろ)

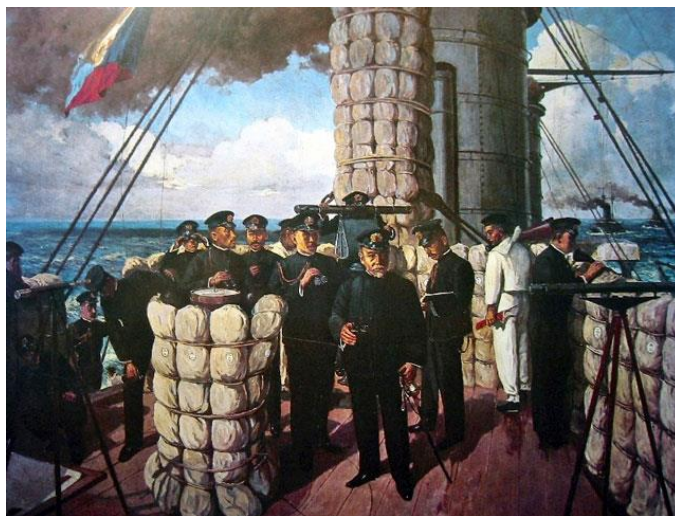


旗艦スワロフとオスラビアがたちまち炎上、伊集院信管と下瀬火薬による鍛鋼榴弾（たんこうりゅうだん）が命中し、甲板や上部構造は炎上し猛火に包まれた。この時ロジェストウインスキーも頭部、頸部、右足を負傷し、血だるまになった。

まもなくアレクサンドル三世も炎上、主力艦の大半が炎を噴き上げる。乱戦中スワロフが南西に進路を変えたのを見た司令部は敵が針路を変えると見て第一・第二艦隊に一斉回頭を命じた。それを見たバルチック艦隊は逆の南西にターンした。裏をかかれたのである。これが**最後の想定外**となる。

しかし第二艦隊のスワロフは故障の為の離脱の動きと判断し、上村彦之丞第二艦隊司令は命令に従わず独断によって回頭せず、そのまま追撃し「我に続け」を意味する信号旗を掲げ速度をあげた。2千6百メートルの至近距離に迫り、砲弾は面白いように敵艦に命中した。誤りに気付いた第一艦隊も追撃した結果、挟撃する形になった。使用弾は徹甲榴弾に変わり敵艦隊の艦隊は穴だらけとなり、海水が流れ込み、午後三時十分オスラビアが最初に沈んだ艦となった。午後七時頃アレクサンドル三世、戦艦ポロジノ沈没。夜は駆逐艦と水雷艇による夜間攻撃が波行的に行われた。旗艦スワロフは魚雷に止どめを刺され、午後八時半大爆発して海中に消えた。

日本の第二艦隊第四駆逐隊司令は太平洋戦争終戦時の首相、鈴木貫太郎だった。また第一艦隊第二駆逐隊の二番艦「電（いなずま）」には最後の海軍大臣となる米内光政が乗っていた。次の海戦二日目は生き残りのロシアの第三艦隊を捕捉。同艦隊には他の戦艦隊の主力艦も加わっていた。もはや逃げられぬと判断したネボガトフ司令官（第三艦隊）は旗艦「ニコライ一世」に白旗を掲げさせた。秋山参謀は東郷の命を受け、「ニコライ一世」に赴き、ネボガトフと交渉の結果、降伏条件の合意を得た。また降伏した駆逐艦ベドワイに重傷を負ったロジェストウエンスキーが生存していることが東郷に伝えられた。



戦艦三笠を描いた画。左上にZ旗が見える

かくして日本海海戦は連合艦隊の歴史的な勝利で終わった。戦後、東郷や秋山は連合艦隊の勝利について、「天佑神助」と表現している。誤算から始まった海戦は、最後の誤算も上村彦之丞によって助けられ事なきを得た。これらは天運と呼ばれようと、三笠を信じ、将兵を信頼して、捨て身で臨んだ東郷の勇気と決断はこれからも長く語り継がれるであろうし、また語り継がねばならぬ。

※ ロシア艦隊・・・38隻中21隻沈没。拿捕・抑留6隻。

ロシア本国に帰り着いた艦は特務艦1隻。

ウラジオストックにたどり着いたのは巡洋艦1隻と駆逐艦1隻、
その他の艦船は第三国で武装解除された。

将兵15,000人中捕虜約6,106名、戦死者4,830名

日本・・・・・・水雷艇3隻沈没、戦死者117名

秋山の「七段構え」の遊撃計画は二段目から始まり、四段目で敵艦隊を殲滅した。いくつもの想定外をのり越え、日本の連合艦隊が奇跡を起こし、完全大勝利した。その勝利の要諦とは何か？ 彼らは何故正確な判断を下し得たのか？ この様なことを学ぶのが、「歴史を学ぶ」真の意味だと思うのです。その為に人物像を知る事も必要だと感じています。

次回はその様なことを学びましょう。

平成27年11月24日

志雲会代表 有馬正能